

真紅で満ちる、アカイの部屋。その中にいるアカイは、大忙しで痩せた体を動かしていた。黒いビニール袋を引っ張り出しては、ソファやベッドに被せてゆく。赤い部屋は、姿を変えはじめた。照り輝く黒が、赤を隠した。

アカイは一息ついて、カーペットの上に寝転んだ。気管が、砂利を含んでいるかのような不快な音を出す。それでも、アカイは小さく弾ける高揚を感じていた。スूपの感情はいまだにあるが、弾けの感情がそれを消しつつある。もう少しすれば、何か変わるかもしれない。アカイは、久しぶりに幸福の笑みを作った。

部屋の外では、なにやら風が走り回っていた。雲が出てきたのだろうか。あたりが暗くなってきたような気がする。走る灰色の雲のことを、アカイは思い描く。しばし呆けた状態だったアカイの耳に、ドアの叩く音が突き刺さった。アカイは身をすくませ、半身を起こした。ドアはまだ打ち鳴らされている。どんどんどんどん、がんがんがんがん。

「……誰だい？」アカイは、飛び出そうになる心臓を飲みこみながら、小さく訊ねた。

だが、ドアの向こうの者は聞こえなかったようだ。再び叩く音。アカイは、今度は声を張り上げて言った。「誰だい？」

ドアの向こうの誰かさんは、「部屋を探してるの」とぶっきらぼうに答えた。どうやら少女らしいが、知らない声だった。

「俺の家じゃないね」すぐに頭が働かなかったアカイは、意味のわからないことを口走った。そうして、よくよく考えたあとに、もう一度言い直した。「誰の家のことだ？」

「アオって子の部屋」

ドアの向こうの相手は、不機嫌なようだった。アカイは面倒くさくなって、こう言った。

「すまないが、帰ってくれないか。俺、あんまりその子のこと知らないんだよ」  
遠のいていく足音。少女は去ったようだった。アカイはほっとし、またカーペットの上に寝ころんだ。

数分もしないうちに、ドアが再び打ち鳴らされた。アカイは身を強張らせ、汚い髪を逆立てた。起き上がり、閉ざされた長方形を見やる。

「……誰だ？」

「アカイさん、お久しぶりです。黒です」

冷徹、無感情な声。アカイは、ぎらりと目を光らせ、奥歯を噛みしめた。アカイは手を蜘蛛の足のように広げ、赤いカーペットの上で這いつくばり、じっと動かなくなった。目は、ドア一点を凝視する。

ドアの向こうから、黒の音がする。

「アカイさん、何のお返事がないのも構いませんが、一つ警告しておきますよ、このままいけば、あなたは嵐に巻き込まれることになりますよ。その前に、何か手を打つことをお勧めします」

「……………知らない。帰ってくれ」

アカイは、低い声でようやく言った。

黒は、アカイから返事があっても特に驚きはしなかったようだった。「あなたは、あれからお変わりないですか？」反対に、奇妙に親しげになっていた。黒は問う。「あれからあなたは、何かを見つけましたか？」

「いいや、何も見つけちゃいない」アカイは睨みつけたまま答えた。「真っ赤なままだ。俺は、ずっと、真っ赤なまま。誰がなんと言おうと」

「嘘ですね」

アカイはたじろいだ。

「あなたはあのとき、私に助けを求めました。『広くするために家具の位置を変えたいが、どうしたらいい』と。でも、私は何も言いませんでした。あなたはそのあと、『この色が似合っているかどうか』とも問いましたが、私は判断しませんでした。アカイさん、あれからあなたは、変わっていないというのですか？」

「……………さあ。俺にはわからないね」

アカイは、スープがやって来るのを感じた。ぐつぐつ、ぐつぐつ。アカイの頬は痙攣しはじめる。「帰ってくれないか。俺はもう、あんたと話したくない」

「あなたは、誠実です。何をまとうが、あなたはあなたであることしかできません」

吹き付ける風の音。アカイはその中に、黒が立ち去る靴音を聞いた。風はどんどん強まってきている。アカイを囲う壁たちが、風の唸りをかすかに伝えてくる。

アカイは耳を塞いだ。

しばらくの間、アカイは小石のように固まっていた。内側のヘッドロースプは、今まで以上に大きく波うち、混乱の声を上げている。新たに生まれた弾けの気持ちは、もういなくなっていた。代わりに現れたのは、盛んに燃える炎だった。炎はスープと混ざり合い、酷い腐臭を生み出した。アカイの全身に、かつてない力が駆け巡った。

力は筋肉を震わせ、アカイを乗っ取った。

どれくらい時間が経っただろう。数分か、数時間か。

風の音は、みるみる大きく、乱暴になってゆく。赤色のカーペットは、不気味な墨色に染まりはじめた。ビニールを被った家具たちは、目を閉じるように、光沢を失ってゆく。

アカイは、わずかに残った自我を振り絞り、立ち上がった。蠟の足は、彼を台所へと向かわせた。

ふとその途中、思うことがあって、アカイはドアの前で立ち止まった。そうして、一步一步、ドアスコープの方へ歩み寄った。

ドアスコープの先には、円形を描く広場があった。だが、平穏な様子ではさらさらしない。千切れた葉が踊り狂い、捨てられたチラシが舞い、どうどうと風が吠えている。風はその脇腹で、アカイの部屋のドアを容赦なく揺らしてきた。

と、レンズの端に、ある一つの色が飛び込んできた。

眩い黄色。それは、遠く離れた部屋に住む、キイロの姿だった。キイロは苛立

たし気に、風に向かって歩いていった。

キイロは、悲鳴を上げて転んだ。思わず舌打ちし、暴風を呪う。再び立ち上がると、キイロは踏みしめるようにして、一つのドアを目指した。

キイロの足には、平たいサンダルが履かれていた。輝かしい金色の髪は、ぎざぎざに切られている。短く不揃いな髪の毛。それらは風で乱れ、より一層荒々しく見える。

彼女は、その手に螺子と金属片を持って、ずかずかと歩いていた。彼女の見る先には、緑の部屋があった。彼女は、そこへ向かってまっすぐ歩いていた。

キイロは、この酷い風にむかむかしていた。けれど、この荒れた天気は、キイロの気持ちとどこかで吊り合っていた。ぼろぼろにしてしまった髪、飾り気のない爪、憎々しい重たい瞼、あまり動くことを好まない足。はじめにテレビを眺めていた美しい髪の女は、どこにもない。彼女の身から放たれているのは、精緻に積み上げられた美しさではなく、そのすべてを取り払ったあとに現れた、原石のような力強さだった。

そんな彼女は、心の中で緑のことを呪っていた。この金属片たち、黒が寄りこしてきたごみ。これは、緑が『キイロのものだ』と言って、黒に持って来させたものだ。だが、こんなもの、あたしはいつさい知らない。それが手元にあるのは、

心底気持ちが悪かった。

キイロは怒りの行進を続けた。緑に対し、黒に対し。そして自分自身にも対して。

風は、いく度もキイロの行く手を立ち塞ぐ。だが、キイロは立ち止まらなかった。憤怒は誰にも止められなかった。

もしかすれば、この風はいつか止むのかもしれない。けれど、キイロはそれに対して、悲観的な感情にはならなかった。風がやむのだったら、そのとき、あたしの抱えているいっさいのものが吹き飛んでしまっていればいいと思った。そして、今の自分がどっかにやられていればいいと思った。

チャヤの部屋の前に、黒が立った。黒は、ノックをする前にしばしそこで中の音に耳を澄ませた。

何も聞こえない。黒はドアを叩いた。

「チャヤさん。もしもし、寝ているのですか？　どんな者にも、決断のときがあります。チャヤさん、チャヤさん」

黒は、何度も何度もドアを叩く。

部屋の内側で、チャヤは眠りこけていた。チャヤは、毛玉だらけのカーディガンにくるまりながら、クッションを敷き詰めたソファの上でまどろんでいた。垂

れ下がった頬は、さらに下がって鎖骨に達し、首元を隠している。腰はずり落ち、色褪せた綿のズボンが、皮だけになった足を隠している。

だが本当のところ、チャヤは黒の声を聞いていた。聞いてはいたが、目を開けることはしなかった。風の音は、どんどん強さを増している。洗濯物を取り込まなければならぬだろうか、とチャヤは思う。けれど、どうにも体は動かなくて、指一つを上げるだけでも億劫だった。

洗濯物が窓を叩く。そら豆たちが頭を殴られる。

チャヤは、起きなかった。声を上げなかった。このままこうしているのが、あまりにも楽だった。

緑の部屋が叩かれた。部屋の隅にうずくまっていた緑は、ぎよっとして背筋を伸ばした。

「……また侮辱しに来たんだな……。おい、いいかげんほっといてくれ！」緑は黒に向かって叫んだ。

「あんたのごみでしょ！」

思いがけない女の声に、緑は驚いた。彼女は、キイロだった。緑は立ち上がってドアへと歩き、ドアスコープを覗き込んだ。

丸いレンズの中の彼女は、以前見かけたときよりも違って見えた。髪は艶に満

ちているが、毛先が首元でばさばさに広がっており、腫れぼったい瞼の下からは、挑むような光を放っている。

キイロは、ドアスコープに一本の螺子を突きつけてきた。禿げた青いマニキュアが爪の所々で光る。「これ、あんたが黒に言っ、あたしによこしたんでしょ。まったく。こういういたずらはやめてよね。まじ最低」

「は!? なんだって? 僕そんなこと一度も言っ、ないぞ! 君に渡せなんて一言も……」

「知らないわよ! あいつが渡してきたんだから。他にもあるわよ。意味わからない変な金属ごみ。いったいなんなのっ。とにかく、こんなやついらぬからね!」

責めたてられた緑は、頭に血が上った。あまりにもかつとなって、彼はドアノブを回して外に出ようとした。

が、ドアは開かない。緑は焦った。

「お、おい! もう一度言うが、それ、僕が渡せって言っ、たんじゃぬからぬ!」  
「あつそ。でも、面と向かって言っ、たら?」

キイロはしゃがんでどこかに螺子を置き、そこから立ち去ろうとした。

「おいおいおい、お願いだ、待っ、てくれ……。僕はそんなやつじゃないんだっ、てば!」

緑は必死にキイロを目で追った。だが、キイロはちよつとも振り向きはしなかつた。緑の声は、部屋の中に閉ざされたまま、誰にも気づかれず、消滅してゆく。

「おい！　おい！　待ってくれ！　ここから出してくれ！　ドアが開かないだよ！」

キイ口はどんどん遠くなり、緑はより強くドアノブを掴んで、押したり引いたりを繰り返した。

「頼む、頼む頼む頼む頼む。ここから出してくれ！　出してくれ！　あああ……僕には無理だあ………」

緑は、その場に崩れ落ちた。

彼の背後には、金槌が鈍い光を放って転がっていた。緑は、目先のことと頭がいつぱいだった。彼は、後ろに残っている唯一の道具のことに、まるで気づきもなかった。

先ほど緑がドアスコープを覗いたように、別の部屋でもドアスコープを覗く者がいた。彼女は、不安で高鳴る鼓動を押さえつけるかのように、胸の前で拳を握っていた。

その人、橙夫人は、真向かいにあるアオの部屋をじっと見つめていた。また行った方がいいかしら。でも、こんな嵐の中に出て行って自分が怪我をしたら嫌だし……。橙夫人は迷い続ける。

振り返って、壁にかけられた時計を見やる。主人は帰りが遅くなるかしら。そ

うね、こんな嵐だもの。きっと電車が遅延するに違いないわ。夕飯、今日は買いに行かず、家で作った方がいいかもしれないわね。

再びドアスコープを見やる。ふとそこで、見知らぬ人影が広場を歩いているのを夫人は見つけた。

あれは、誰なの？

影色の髪を持った、怪しい少女。彼女の髪は風で逆巻き、波のようになって、顔の周りを覆っている。少女の周りでは、つむじ風が起こっている。まるで、彼女自身が嵐を引き起こしているかのように……。

「……あれは、アオさん？」

橙夫人は、はっとした。いつしか見かけたことのあるアオと背格好が似ていると夫人は思ったのだ。

けれど、少し雰囲気が違うような気がして、彼女は躊躇を顔に浮かばせた。

髪を逆立てるその少女は、白色のドアの前で、立ち止まった。

シラは、小説の原稿を書き直そうと、回転椅子に座って、足でゆっくりと自分を回しながら、部屋の壁と窓とを眺めていたところだった。強風のおかげで、異様な胸騒ぎがしてくる。日は翳り、白い壁は灰色へと変わってゆく。

気持ち奮い立たせて、再び作業に取り掛かろうとしたそのとき、部屋のチャ

イムが射るように鳴った。シラの全身が強張った。しばらくドアを睨みつけていたが、ようやく重い腰を上げると、シラは足を引きずって、ドアスコープを覗き込んだ。

そこには、暗い色の髪を肩まで伸ばした、見かけない少女が立っていた。顔色はずいぶん悪い。

「何の御用ですか」シラは硬い声で訊ねた。

「ちよっと聞きたいことがあるんだけど」暗い髪の少女は、顔をレンズに近づけ、平坦に言った。

シラはため息をついた。今は人に会う気分ではとうていいない。こんな気分になったというのも、すべて黒がはじまりだ。そう、やつさえ来なければ、こんなに不愉快な気持ちになることはなかったのだ。

少女はまだドアの前にいる。シラは一つ息を吐いた。ことがすめば、あの子どもすぐに帰るのだろう。そうすれば、私は再び作業に戻れるのだ。平穏な私の居場所。シラは、早く終わらせようと、なかば躍起になって開錠した。

ドアを数センチほど開けると、風が隙を見て大胆に入ってきた。シラの髪は乱れ、ドアは大きく外側へ開いた。シラは慌ててドアを手前に引き寄せた。

その隙間から、少女の顔が覗いた。

「部屋を知らない？ アオって名前の子がいる部屋」

「さあ。このへんのこと詳しくないからね」シラは、ドアが風にもっていかれないようにするのに精いっぱいだった。

「あなた、ここに住んでるんでしょ？」少女は怪訝そうにシラを見上げる。

「君は誰なんだ？ アオの友だちか？」シラは質問に質問で返した。

少女は、苦いものでも飲みこんだような顔をした。「友達じゃない。でも、もういいよ。見つけたから」

「え、何を？」

だが、少女は「うん、通り過ぎてただけみたい」とか何とか言っつて、そこから去ってしまった。

シラは、少女の行く先に目を細めた。すぐ隣の、青いドア。そこが彼女の目的地らしい。風はシラの頬を殴りつけ、服を引っ張り、髪を掴んできた。シラは、呻いた。

そしてその暴動は、部屋の中にもおよびはじめた。棚も机も、オーディオも、すべて、風でがたついて、喚きはじめる。ついには、机上のマグカップも転倒し、コーヒーを血のように吐き出した。カップはそのまま床へと落ち、破損の悲鳴が響き渡った。

シラは、自分の部屋が自分のものでないような気がしてきた。舞い上がった原稿の数々。物は叫び声を上げ、秩序を手放し、床へと身を投げる。風はぶんぶん音を立て、部屋の中を回り踊る。耳障りな崩壊の音。脆いガラスや陶器は、すべて碎け散る。

それは、シラの中の何かも、少しずつ碎いていった。

シラは、立ち尽くすのみだった。もうどこにも、静けさと平穏は存在しない。

かつてあったものたちが、私だったものたちが、音を立てて消えてゆく。

いや、はじめから私のものなど存在しなかったのかもしれない。あったのは、ずっと、何かを追い求めようとする焦りだけ。

焦りの蠅は、ぶんぶんぶんぶん、シラを急かす。もっと飛ばなければ、お前は墜落する。もっと高く、もっと高く。飛べ、飛べ。飛ばなければ、お前は落ちてゆくだけだ。

蠅の立てる羽音は、静寂と自由を切り刻む。

シラは茫然とし、騒音を立てる部屋から、一步、二歩と退いた。

だが、シラはそこではっとした。誰かの泣き声がしたのだ。幼い子どもの声。

少年と少女、二人の声が、渦巻く部屋の真ん中から聞こえている。

「助けて！」

「ここから出して！」

シラは愕然とした。「お前たちは……」

暴風がさらに猛威を振るいはじめる。家具たちをばらばらに崩してゆく。

シラは、最後にさっと振り返った。

さっきの影色の少女が、アオのドアを、今まさに叩こうとしていた。

ミスターパープルはバスローブをまとって、キッチンで酒を煽っていた。が、

耳を塞ぐほどの強烈な風が窓を壊さんばかりに吹き付けてきたので、彼は、思わずグラスの中に酒を吹き出した。

何だというのだ、久しぶりの休日だというのに。ミスターパープルは思いつくりの罵りの言葉を頭の中で呟いた。

と、そこで固定電話が鳴った。あまりないことだったので、ミスターパープルはぎょっとして立ちすくんだ。しばらくして電話は切れたものの、間を置かず再度鳴り出した。ミスターパープルは憤りのため息をつき、受話器をとった。

「もしもし」

「ああ、よかった。先ほども、携帯におかけしたのですが出なかったので、こちらにおかけしました。ミスターパープルさんですね？ 黒です」

その機械的な声に、ミスターパープルの眉は強く寄せられた。

「何の用だ」

「まだお部屋におられるのですね。少し話したいことがあります」

「……休日なんだが。正直言つて、僕はあなたとは話したくないんですよ。わかりますか？」

「皆そう言います。ですが、これで最後になると思います。……この嵐の意味をご存じで？」

「知らない。夏だからだろう！」ミスターパープルは、馬鹿馬鹿しくなって叫んだ。

受話器の向こうで、一瞬の沈黙。だが、黒はひるんだわけではないようだ。む

しろ、おかしく思っているようだった。

「ミスターパープルさん、ここに夏はありませんよ。覚えておいでですか。契約時に話したはずですが。……とにかく、一つ言わせてもらえば、あなた方はここに長く居すぎたのです。だが、いつしか決断のときが迫ってくる。部屋は、自分を守る場所であり、籠れる場所ではありますが、一時的な避難場所でもあるのです」

「僕はここに住むぞ！ 永久に！ お前が何を言おうが、ここは僕の家なんだ！ 金も払っているんだからな！」

「誰に？ ……。この私に、でしょう」

ミスターパープルは、恐ろしいものにも触れたかのように受話器をさっと顔から離れた。だらりと垂れた受話器から音声漏れる。

「ミスターパープルさん、パープルさん。お部屋の一新は新たな景色をあなたに運びます。もう嵐は、猛威を振るいはじめていますよ」

電話はそこで切れた。ミスターパープルは、最後まで聞いていなかった。彼は、髪を怒りでもみくちやにし、部屋をクマのようにうろつき回っていた。

「あいつめ、この僕を追い出そうと……。なるものか、なるものか！ 今日休日だぞ！ 今日休日だぞ！」

ミスターパープルは、まだ叫んだ。「くそう！ こうなれば、ゆっくり寝てやる……」

だが、ミスターパープルの言葉はそこで途切れた。何かが転がる甲高い音が、

外から聞こえたのだ。ミスターパープルは、ドアスコープを覗きにいった。

だが、彼はそこで唾然とした。

外に広がるのは、もうかつての広場ではなかった。甲高い音は、瓦や空き缶が転がる音だった。灰色の風が吹き荒れ、はがれた壁の破片が舞い、地面が隆起し、木々が咆哮する。なんとも痛ましき世界が、そこに広がっていた。

ミスターパープルは、衝動的にドアノブを捻った。死の予感がした。

だが、ドアはびくともしない。風圧で開かなくなっているのだと考えたミスターパープルは、恐怖に陥った。彼は、何か道具がないか部屋を探し回ったあげく、結局、体当たりでドアをぶち破ることに決めた。

彼は、何度も何度もドアに当たり続けた。だが、ドアは頑なに開くことを拒む。ミスターパープルは、今度は助走をつけはじめた。当たるたびに、助走の距離は長くなる。ぶつかっていくうちに、彼は虚しさに囚われていった。

ミスターパープルは、どこか遠い記憶に引っ張られているような感覚がして、胸が苦しくなった。ドアは一向に開かない。それでも、なぜ自分は開けることに必死になるのだろうか。こんなに強固にそびえているのに？

だが、この感覚には、ミスターパープルは覚えがあった。操り人形が舞台の上で踊ることを夢見ていた頃の話だ。その頃は、目の前のドアを開けようと、死に物狂いで闘っていた。

ミスターパープルの目に、震えるほどの無念が沸き上がった。彼は歯を食いしばり、何度も体をぶつけた。

嵐がやってくる。嵐がやってくる。地面は歪み、棚から椅子から机から、何から何まで揺らして散らす。粉々にして飲みこんでは、空の上で雷鳴を轟かせ、青い雨を吹き付ける。照明は狂ったように点滅し、墨色の風は、あたりをいたずらに駆け抜ける。泣き喚きの合唱。黒く染まった木々たちが手招きをはじめ。重い重い頭を揺らし、熱に浮かされたようになりながら、どーうどーうと吠え声を上げる。雲は走り、塵が景色を曇らせる。屋根も壁も、木も地面も、古いところからすべて剥がされ、宙や地を、転がる、転がる。

そんな風景を、窓の内側から、アオはパレットを手にして眺めていた。背後のドアには、目を向けない。

外にネイビーが来ていることは、もうとっくにわかっていた。けれど、アオは何もしなかった。

ネイビーは拳を上げ、ノックをしてくる。壊さんばかりの衝撃音が三回、部屋の中に響き渡る。

アオはついに振り返って、ドアの方へ歩いていった。山と積まれた人形たち。その向こうのドアの外。彼女はいる。いかれた女のネイビーが。

再びノック。今度はさつきよりも強く、激しく、容赦ない。

「帰ってよ！」アオは怒鳴った。荒々しくされて神経が逆立つ。

けれど、ネイビーはやめなかった。それどころか、今度は体当たりをしはじめたようだ。鈍い衝撃音が続けざまにやってくる。

「いいかげんにして！ もう帰って！」アオは不愉快でたまらず、涙声になった。震動はどんどん大きく、激しくなっていく。天井から塵と埃が落ち、家具の上の小物が倒れる。轟音がさらに押し寄せてくる。

「お前が無視したせいだ」

風音と共に、低い声がやってくる。

「お前が無視したせいだ。お前が無視したせいだ、お前が無視したせいだ！」

アオは、胃がきりりと痛むのを感じた。次の瞬間、爆発音と同時にドアが粉碎した。破片がアオの方に降りかかってくる。暴風は人形の壁を吹き飛ばし、虚しく床へ転がした。

アオは顔を庇った腕を降ろした。そこには、豪然として立つ、ネイビーの姿があった。

アオは、身動きがとれなかった。ただ、敗者同様、泣きじゃくっていた。そんなアオの胸ぐらを、ネイビーが掴んできた。

「お前は、あたしを無視し続けた。お前はあたしを恥じ、あたしを閉じ込め、あたしを放置した！ そうだろうか？」

アオは言葉が出なかった。呻こうが、もがこうが、ネイビーは射るようにアオを睨みつける。その目は、実に、自分自身のものであった。鏡を覗いたときにそこにあるのと同様、彼女の目は、彼女自身であった。アオは、もう逃れられなか

った。どれほど遠くまで逃げようとも、どれほど時間を置こうとも、何度も繰り返そうが、彼女からは逃れられない。

そう、自分からは。

アオは叫んだ。罵倒が弾丸のように口から飛び出す。それと同時に、「あたし」は信じられない強さで胸ぐらを握り上げてきた。アオは呼吸ができなくなった。罵倒は「あたし」の口からも出てくる。それらは礫となって、アオを痛めつけてきた。足が中を蹴る。「あたし」が大きくなったのか、それとも床が遠のいたのか……。

豪速で取り巻く風たちは、壁もろとも破壊し、人形を蹴散らし、ありとあらゆる物たちを打って、引っ掻いて、散り散りにしていった。闇が迫ってきているのを感じる。アオは、視界の色という色すべてが、失われてゆくのを見た。息はうまくできず、足の感覚もない。ふわりと浮いているようで、どこか地の底まで落ちていきそうな、計り知れない重みがある。

このまま消失してしまうのかもしれない。体は見えぬ棘に貫かれ、何度もきつく縛り付けられる。声も失われ、ただ存在することしかできない。

アオは茫然として無色の天井を見つめる。音も消えた。匂いも消えた。すべての活力の源であった体の中心の炉は、火を焚くのを、やめた。

アオの手から、力が抜けた。

「あたし」の口から、憤りの悲鳴が上がった。

悲鳴が上がったその刹那、アオの部屋の前に、誰かの影が立った。

その影を見た「あたし」はたじろぎ、さらにアオを強く絞め上げた。

だが、アオは、最後の力を振り絞って、やって来た者の方を向いたのだった。

目の見えなくなったアオには、一つの星の光しか見えなかった。彼女はそれに向かって、手を伸ばした。その星の光の名前を、アオは知っている。一度ここを訪れに来たから。一方、その人は、まさか自分が光となるなんて、思いもしなかっただろう……。

橙夫人は、双方のアオを見つめた。締め上げられている哀しい瞳のアオ。胸ぐらを掴んでいる、怒りに満ちた暗いアオ。

首を絞められているアオの方が、橙夫人の方を見つめる。その目には、救済を求める色が浮かんでいた。

風は、いつの間にかやんでいる。塵は時間を止められたかのように宙に漂い、何もかもが静かになっている。

橙夫人は、一歩ずつ、ゆっくりと、二人のアオに近づいた。

「あんた、何しに来たの？ あんたにできることなんて、何もないんだよ！」

暗いアオは、勢いよくアオを壁にぶつけた。懐に隠し持っていたナイフをひらめかせ、アオの頬に突きつける。「こいつはろくでなしだよ。何もできやしない。ただ籠って空想に耽ってるだけ。虚しい子。地面の石ころほどの価値もない」

「どうしてそう思うのよ？」

暗いアオは、橙夫人のことを睨みつけた。だが、橙夫人の目には、不安も好奇心もなかった。そこには、問いしかなかった。

暗いアオの胸の内はざわついた。彼女は歯を剥き、その隙間から絞り出すようにして言った。「……こいつは、見捨てた。見捨てて、忘れようとした。何度も、何度も」

「誰を？ あなたを？」

「そうだよ。あたしは、もっと別な方法で生きたいって言ったんだ。それなのに、こいつが『だめだめ』言うから。あたし……、それでも闘ってきたのに。なのにこいつは逃げるんだ！ いっつもいっつもー！」

ネイビーは切れ切れに呟いた。「『黙って』と引っ掻き、『知らないわ』と言って刺し、『すべきすべき』と殴っては、『やっぱだめじゃない』と撃ち殺す。最後に言うのは、『さようなら』『さようなら』『さようなら』『さようなら』『さようなら』。そして、『いなければいい』……」ネイビーは声を震わせた。

そしてついには、どろどろと床に崩れ落ちるのだった。同時に、アオの方も崩れ落ちた。

床に伏せるアオは、自分の手に違和感を覚え、手を見つめた。そこには、黒い

血糊がぬらぬらと光っていた。見れば、倒れたネイビーの腹に、深々と刃物が突き刺さっていた。

いつの間に、自分は彼女を殺したのだろうか？

いや、いつの間に、ではない。

自分は常に、このやり取りを繰り返してきたのだ。

自分との攻防を。

自分はいつも自分を殺し、自分から逃げる。知らないところで傷つけ、息の根を止める。「あたし」はそれでも立ち上がり、何度でも再生する。また私を追いかけはじめる。

そうして対決する。自分が生きている限り、何度でも何度でも、これは行われる。

ネイビーが、「あたし」が、暗い髪の間から、こちらを静かに見つめてくる。

アオの目の中に、「あたし」のその瞳が反射する。

「どうして無視するの？」

「あたし」は問う。

「どうして私を無視するの……？」

アオは、ゆっくりと目を閉じた。そして、朝日が昇るがごとく、とてもゆっくりと、再び目を開けた。目の前の「あたし」は、暗がりにいる獣のように、しっかりとアオの瞳を捉えた。アオは、困惑しなかった。

「……私は、あなたをどうすればいいの？」

アオの声は疲労で震えた。

アオは、もうどうしようもなくなって、わずかに首を動かし、玄関に立つ橙夫人を見つめた。

そこで、わずかにアオは目を見開いた。橙夫人の隣に、知らない人影があった。鈍い夕日色のワンピースを着た、若い女性。彼女は、心配そうに部屋を覗き込んでいた。彼女は、アオと目が合うと、少し笑って見せた。

アオの視線に気づいた橙夫人は、ああ、と眉を上げた。

「あのね、ここへ来る途中で出会ったのよ。ちょっと引っ込み思案なんだけど」  
橙夫人はそう言うや、ワンピースの彼女に手招きした。

「……あ、ええと、黒柿よ。よろしく」

ワンピースの女は、はにかみながら言った。橙夫人は笑って、黒柿の姉さんを引き連れてくると、アオの傍に座った。

「ねえ、ここから先の広場に、何があると思う？」

橙夫人は、太い足を延ばして言った。彼女の靴は、先が破けて指が見えている。指は、中で縮こまったり広がったりを繰り返していた。

アオは、疲れ果てて何も考えられなかった。とりあえず、力を入れて身を起きました。

「さあ。きつと、何もない、とか……」

「そう。何もないわ。何もかも、なくなったの」

橙夫人は、ドアの向こうに顔を向けた。眩しい光。雨の匂い。挟り出された土

の匂い。

「私、すごく悲しいの。外に出てきたはいいけど、ものすごく寒い。セーターを着てくるんだったわ。それかコートを。もしくは甘いものかなんかを持ってくればよかったわ」

鏡面のような静けさ。それと共にある、塞ぎようなない虚しさ。橙夫人とアオは、しばらくの間、そんな空気をそっと吸っていた。

「……ねえ、アイロンを船だと思ったことはある？」

橙夫人は、突如問いかけた。「その船は、魚のいない海に、いったいどうして出航しているんだろうって……。あたし、息子にそう言われたことがあるのよ」

「……あなたは、何て？」

アオは、夢の中に浮いたような気になりながら、訊ねた。

橙夫人は、言った。

「皴がないように、あるべき姿であるように、そのために出航しているって言ったのよ」

橙夫人は、目を細めた。「そうすると、波はたたないねって、息子は言った。波がたたなければ、何もかもそのまんま。ぴったりずっと、同じままなの」

黒柿の姉さんがうなだれた。悲愴、恥じ、諦め。それらが一緒くたになって、彼女の中から染み出している。

「……でも、何か別のことをすれば、変わるはずですよ」一つ一つ、絞り出すようにして、アオは言った。「船を捨てたり、泳いで波を立てたり、あぶくを出した

り。そう、きっと船長自身が変われば、海も変わるんじゃないですか？」

橙夫人は目を見開いた。そして黒柿の姉さんは、突如、弾けるように笑い出した。「そう、そうよね！ あたしもその意見に賛成だわ！」

橙夫人はぎょつとして黒柿の姉さんを見やった。黒柿の姉さんは、それに気づくと、すつと首をすくめ、哀しみの顔をまた宿した。だが、今度は橙夫人が、吹きこぼれたかのように笑い出した。

「私、あなたがそんなことを思っていたなんて知らなかったわ！」

橙夫人は、おかしそうに自分の膝を叩いた。黒柿の姉さんは頬を染めて首をすくめ、「そうよ……。そうなのよ」と小さく言った。それから二人は、こちらのわからない相談をしはじめた。

「……自分の時間は自分のものなのよ」と黒柿の姉さん。そしてこそそと何かを提案する。橙夫人は「え!？」と叫び、また黒柿の姉さんのお喋りに付き合われる。やがて橙夫人は、「……そうね。考えてもいいかもしれないわ」と頷き、黒柿の姉さんは、「今、行きましょ！ 今、今！」と夫人の肩をゆすった。「人生短いんだから！ 私、ルーブル美術館に行きたいのよ」と黒柿の姉さん。「しい！大きな声でそんな定番な場所言わないでちょうだい。あんまりものを知らないのがわかつちやうじゃないの」と橙夫人。「じゃあ、どこがいいっていうの?」「それは……、あとで考えることにしましょ。……一緒にね」

黒柿の姉さんは、そこで、たいそう幸せそうな微笑みを浮かべた。橙夫人の方は、受容の笑みを顔に浮かべていた。橙夫人はその瞳を、アオの方にも向けた。

橙夫人はアオの方に顔を寄せ、静かに言った。

「……この子、お転婆でそれほど賢くなさそうでしょ。そう、実際そうなのよ。けどね、私は愛してあげることに関心したわ。だって、とても大事な人だから」橙夫人は、床にうづくまるネイビー色の少女に顔を向けた。「そう、大好きなの。とても、とてもね」

橙夫人は、そう言って立ち上がった。黒柿の姉さんも、共に立ち上がる。彼女たちは、手を取り合って、部屋を出ていった。

もう風は吹いていない。けれど、何もかも破壊されたままだった。二人は、その中を共に進んでいく。崩れた壁、ひび割れた地面、なぎ倒された木々。二人は、それらの間を、何ごともなく歩いてゆく。時折、言い合いをしたり笑い声を上げたりしながら。

広場の端で、彼女たちは、一人の女と立ち話をしはじめた。金髪をざく切りにした、背の低い女。その女は、汚れ、傷つき、痛々しい姿をしていたが、すり切れたサンダルでさえも、彼女にある種の勇ましさを添えていた。

その女、キイロは、瓦礫の下から、誰かを引き出そうとしていた。手をとって引き上げたのは、黄土色のパーカーを着た、冴えない少女だった。少女は、ためらいがちにキイロの顔を見やっていたが、キイロの方は、転んだ傷の痛みを耐えながら、ただ黙って彼女を抱きしめるのだった。

右手にある紫色のドアから、幾度か騒音がしていた。しばらくすると、ドアは揺れと共に勢いよくこちら側へ開いた。バスローブ姿の、汗まみれの男。彼は、

澄み切った空に唾然としていた。男はそして、外にいるキイロや橙夫人らの様子を、困惑して見やるのだった。

それから、自分の前にやって来た者の姿を見ると、彼の体は硬直した。

ミスターパープルの前には、上品な茄子色のスーツをまとった少年がいた。少年は、警戒心あらわにミスターパープルを見つめた。ミスターパープルは、その少年と目を合わせるや、がっくりと膝を折った。

「僕、うまくやれたかな？」

少年は訊ねる。少年の手足には、だらりと長い糸がくっついていて。その糸はミスターパープルの方へと続き、やがて彼の手の中の木切れへと繋がっていた。

「僕、うまく踊れた？ うまく踊れた？」

少年は訊ねる。ミスターパープルは、膝をついたまま、少年に頭を垂れた。

そんな景色の前を、三人の人影が通り過ぎたことで、アオは我に返った。

背の高い白い影。その後ろを、灰色のオーバーオールを着た少年と少女が駆けていった。

「みんなに知らせてやるんだ！」

「待ってってば！ もう少しゆっくりにしようよ」

彼らは、お互い正反対のことを言いながら、シラの後ろを跳ね回った。シラは、別に叱りはしなかった。ただあるがまま、走らせるままにしていた。

三人は通り過ぎたが、アオが呆けているところに再び戻って来て、部屋の中を覗いてきてくれた。

「やあ、何か、手伝えることはあるかい？」シラは、アオの顔色を見るや、言った。

「……みんなは、どうなったの？」

シラはそこで、傷心の滲む笑みを浮かべた。

「出たものは、出られた。出なかった者は、出られなかった。……うん、ただそれだけだ」

「その子、たちは……？」

「ああ、これか。……。……。部屋の中にいてね。危うく消えてしまうところだったのを、助けたんだよ。ずいぶんうるさいが、話を聞いてやることにしたんだ。もう一度、ね。もしくは、まだ続くのかもしれない……。あ！ 次の本はこういう内容でいこうかな。どう思う？」

途中でシラは、傍にいる子どもたちに向かって話しはじめていた。男の子は、「絶対、やるべきだね」と言い、女の子は、「カフェラテ飲んでからがいいよ」とごねた。シラは乾いた声で笑った。緩みのある暖かな笑い。シラはそのあと、アオに向かって頷くや、彼らと共に行ってしまった。

人々の声は遠ざかっていく。みな、疲れ果て、傷みを抱えながら、隠れていたもう一人と、手を取り合って去っていく。

彼らは、どこに行くのだろうか。誰も行方はわからない。

最後にアオのドアの前に立っただのは、黒だった。ぴたっと止まった影の動きで、アオは、彼だとすぐにわかった。

「嵐のあとの町並みは、いかがでしょうか？」

黒は、変わらず淡白な調子で訊ねる。しかし、すべてを張り倒して生まれた外の眩しい光が、彼の様子に少しばかり軽快さをもたせていた。

「とても、悲惨だわ」アオは言った。

「その中でも、前に進もうとする者が存在する。あなたはそれを、かつて『森の再生』と呼んだ」

「……今の私には、もうそれを見つけれない。あまりにも、変わってしまったから」

アオは、横たわるネイビーを見つめた。アオのそんな様子を、黒も見つめる。

「どんなものにも、変化がある。違いがある。正反対の面がある。そこで私たちは、目をつむって、それらについて思考をする。いいか、悪いか。排除すべきか、そうでないか。そんな思考たちは、やがて思いもよらぬ形で、私たちを閉じ込める。思い違い、偽の評価。壁が私たちを取り囲み、私たちは、壁がすべてになる。

壁はときに、私たちを必要でない危険から守ってくれる。長い間住んでいたその空間は、我々にとって、抜け出しがたい部屋となる」

黒は、じつと二人の少女らを見下ろす。

「部屋は、夢を見るのにいい場所です」彼は改まった様子でそう言った。「それと同時に、茨も育ちます。その痛みが我々を引き裂いたとき、我々は、一つの勇氣ある決断をしなくてはなりません」

聞いていたアオは、憂いをその顔に宿し、瞼を半分伏せた。

「……この子と共に歩いていけるか、そんな決断を、私はできそうにない」  
「ええ。これらのことには、長い時間が必要になるでしょう。けれど、恐れないで。あなたは常に変わっていつている。永遠に同じものなどない。あなたはもう、別の世界を見ている」

黒は、固い音を立てて、一步部屋に入ってきた。アオは逃げなかった。

「陽の煌めき、波のさざめき、鳥が歌う花の賛歌、窓の向こうで揺らめく木の葉、起きること、寝ること、食べること。服を着ること、テレビを見ること、絵を描くこと、髪を染めること、考えに耽ること、子を育てること、料理をすること、景色を眺めること、歌うこと、誰かと話すこと、ゲームをすること、湯を沸かすこと、旅に出ること、誰かを想うこと、風に吹かれること。……様々な感情、揺さぶり、高まり。それらは、本当にすぐ近くで、あなたのことを待っている。いつまでも、いつまでも」

アオは、うずくまったままのネイビーを見つめた。とても惨めで、哀れで、決して快いとは言えない存在。けれど、そんな彼女は、「あたし」は、とても……  
……………。

黒は、無言で部屋を出ていった。アオは、じっとネイビーのことを見つめた。一つの言葉が、喉に突っかかる。彼女に一言でもこの言葉をかけたことがなかったのだと、今になって気づく。気恥ずかしさ、こみ上げる否定。けれど、アオは、うずくまる彼女に手を伸ばして、言ったのだった。

瓦礫の山と化した、名もない広場。ぐるりと囲むドアの中には、開いていないものもある。

そんなドアたちを眺めながら、中央に佇む影がある。

黒だ。

裾を砂埃で汚しながらも、彼はまっすぐに背を伸ばし、以前と変わらず、無表情をたたえている。彼の手には、黒く四角い鞆が握られている。

彼は、ふと地面に膝をつくとき、その鞆から何冊かの本を取り出した。黄色い本、白い本、紫の本、橙色の本、青い本。彼は、それらを地面に置くと、鞆を閉じ、立ち上がった。残ったわずかな風が、次から次へとページをめくる。ぺらぺらと、本の語る内容は、風により霧散させられていくようだった。掴める前に消え、知る前に変わる。ページは音を立てつづける。乾いた音。空虚な音。軽快な音を。

その中に、何者かが駆けてくる音が重なった。

黒は、振り返った。その者と衝突する刹那、彼は咄嗟に相手の腕を脇に抱え込んだ。

「アカイさん、何をやってらっしゃるのです」黒は、手にナイフを持つアカイを制しながら、衝動で声を震わせた。

アカイは、身を解こうともがきながら、黒の下で言った。

「お前はいつも、俺を怖がらせる。何者かもわからねえ。だったらいっそ、何か

言えないようにすればいい」

「私は……」

「お前の顔は、もう見たくない」

瞬間、アカイは黒の腕と顔に噛みついた。ひるんだ黒。その隙に、アカイはその腹へとまっすぐナイフを突き刺した。

漆黒に染まってゆく背広。ナイフの柄から落ちる、鮮紅の雫。黒の無表情の顔が、アカイの肩に崩落する。

ドアスコープの円の向こう、赤いシャツの男と黒いスーツの男は、立ち枯れの木のように沈黙した。赤いシャツの男の膝は、やがて、笑うように震えはじめた。彼の肩に乗る黒の顔は、それと共に振動する。黒の瞳は、いまだ精力を宿し続けている。

黒は、ドアスコープ越しに、こちらを見つめた。その漆黒の二つの瞳は、逃れられない力を持っているようだった。それは、心の奥底までを見通し、真実のみを見つけ出そうとするかのよう。隠し持っている、自分でも気づいていない、すべてのことを。

黒はこちらを見つめ、問いかける。

「あなたは、外に出ますか。それとも、お部屋に留まりますか？ 十人目の住人様」